

クローズアップ・コレクション

新井謹也

《鉄釉草花文書簡差》

昭和期 | H15.0cm | 平野敏三氏寄贈

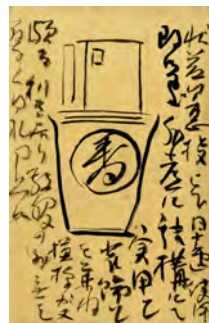
高曾由子



新井謹也は、現在の三重県鳥羽市生まれ。三重県尋常中学校（現・津高等学校）在学時に、国画教師鹿子木孟郎の指導を受けたことを縁に洋画家を志し、京都で浅井忠、鹿子木孟郎に教えを受けました。大正期には洋画家として活躍しますが、1920年には陶芸家に転向し、「孚鮮（ふせん）陶画房」を開いて制作に励みました。

新井が陶芸家に転向したきっかけについては諸説ありますが、自身は1937年の伊勢新聞¹で「洋画家を志した私でしたが日露戦争後数年にして私はその道の天才でないことをハッキリと自覚し、自分の洋画制作が将来十年、二十年後に国家社会のためどれほどの必要ありや否や」と疑問を持ったことを語っています。「この道ならそれが芸術的価値が無くとも実用品として皆さんに愛用していただけるだらうと考え」て陶芸を始めたといい、転向の背景には、36歳にして苦渋の決断がありました。しかし、新井は洋画への挫折を再出発への熱意に変え、芸術味豊かな日用品制作に邁進。まもなく大らかで渋みのある独自の作風を確立して「特自で芸術味が豊富」²と評されるに至ります。

本作は昭和期に制作された書簡差の一つ。やや歪んだ器に軽妙な筆さばきで草花が描かれます。書簡差（状差）とは、手紙をさしておく器のこと。陶器のものは珍しいですが、新井は1934年頃にこれに取り組み始めています。初めての作は友人の洋画家太田喜二郎に贈られ、実用と装飾を兼ねたその姿が好評を得ました。手紙の往來を喜ぶ文化的な暮らしに寄り添った本作には、挫折を経てたどり着いた、新井独自の境地を見て取れます。



太田喜二郎から新井謹也へお礼の葉書
1934年7月2日消印

1 | 「本県が生んだ陶芸界の偉材 新井氏の製作展」『伊勢新聞』、1937年日付不明
2 | 板谷波山「本年の陶磁界の情勢」『大正拾五年度図案工芸年鑑』図案芸術社、1925年

準備中の企画展より

坂本龍太



サンパウロ美術館展開催時の美術館前看板（1982年）

11月19日（土）よりコレクションによる「西洋美術へのまなざし—開館40周年を記念して」展を開催予定です。本展では美術館が収集してきた西洋美術の名作を展示するとともに、これまで企画展として開催してきた西洋美術の展覧会を紹介します。

遡ること40年前、当館はサンパウロ美術館展とともに開館しました。この展覧会ではラファエロやベラスケス、ルーベンスなどそうそうたる西洋美術の巨匠たちの傑作が並びました。以降、エルミタージュ美術館展やヒューストン美術館展など、有名美術館のコレクション展を開催。また、1982年のヨンキント展を始め、ドガやシャガール、ブラックなど著名な西洋作家の個展も度々開催し、西洋美術の名品の数々を展示してきました。

本展ではこれらの企画展を開催時のポスターやチラシ、会場のスナップ写真などで振り返る予定です。展覧会ではぜひ、三重県立美術館40年の歴史に思いを馳せていただければと思っています。

表紙解説

「開館40周年記念 岡田米山人と半江展」より 村上敬

不思議な富士山図。この不思議な印象は、濃墨の黒と素地の白の強烈な対比によってもたらされる。ほとんど一定の太さで造形された岩、ひときわ黒い山肌をもつ富士山も、清澄で神々しい富士山のイメージと異なる。ただ、細部をみると、淡墨のぬり残しによって表現された積雪や、遠景に向かうほど小さくなる松の遠近表現など、自然描写に工夫が施されている。さらに、近景に三保の松原、中景に薩陀峠、遠景に富士山を描く構成そのものは、一つの定型に則している。

作者の岡田米山人は、大阪北郊で米屋を営む商人であったが、家業のかたわら詩書を独修し、長じて津藩藤堂家に仕えた人物である。その独特な画風は、「奇矯」と評される。本作品は、米山人としては極めて早い時期に制作されたものであるが、すでに米山人の個性が発揮されている。画中の賛によれば、隠者の住む仙境として、富士山が描かれたことがわかる。賛は「高山嶺上雪／時散行雲新／愛此雲与雪／橋取贈何人」。

岡田米山人《雪中富士山図》天明7（1787）年 個人蔵



利用のご案内

開館時間 | 午前9時30分 - 午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日 | 月曜日（祝休日にあたる場合は開館、翌平日閉館）

2022年9月20日（火）、10月11日（火）
改修工事休館 / 2022年12月12日（月）～2023年3月下旬（予定）
※レストラン「ミューゼ・ボンヴィヴァン」の営業にしましてはレストランのウェブサイトをご確認ください。

観覧料 |

○常設展示 [美術館のコレクション+柳原義達芸術 / 特集展示]
一般 310 (240)円
学生 [大学・各種専門学校等] 210 (160)円
高校生以下無料 ※ ()内は20名以上の団体料金

○企画展示 / その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等（アプリ含む）をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日（毎月第3日曜日）の観覧料は、各展覧会（企画展 / 常設展）の団体割引料金となります。
※関西文化の日 [2022年11月19日（土）、20日（日）] は、常設展の観覧が無料となります。

メールマガジン |

三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式Twitter |

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。 Follow us on Twitter @mie_kenbi

三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11

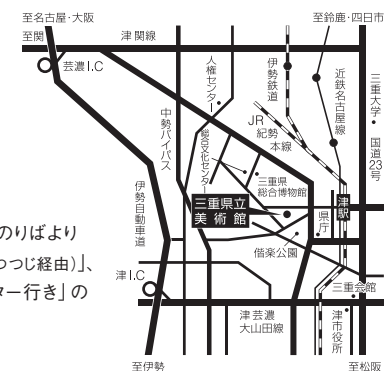
TEL.059-227-2100 (代表)

FAX.059-223-0570

https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/

交通 |

津駅（近鉄・JR）西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き（むつみ・つつじ経由）」、「夢が丘団地行き（総合文化センター前経由）」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 |

一般会員：3,000円 ペア会員：5,000円
グループ会員（4名）：8,000円

◎特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局（TEL 059-227-2232）までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館 協会の賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

年会費 | 年間一口

法人：50,000円 個人：25,000円

準会員：10,000円

◎特典

展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協会事務局（TEL 059-227-2232）までお問い合わせください。

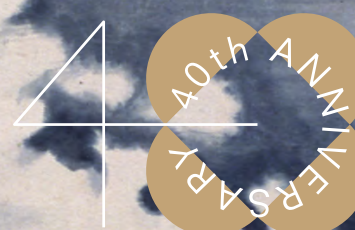
三重県立美術館ニュース

HILL WIND 51

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS

三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 51」

発行日 | 2022年9月15日（休・無断複製）
企画・編集・発行 | 三重県立美術館「チキーン」濱田尚子 印刷 | サンマックス株式会社



開館 40周年を 迎えて

速水 豊

1982年の秋に開館した三重県立美術館は、今年40周年を迎えた。80年代には地方に多くの美術館が設立したが、三重の美術館の開館も地域において画期的な出来事であったろう。日本近代洋画に焦点を定めた積極的な作品収集、展覧会や調査研究を行う学芸の体制、岡田文化財団をはじめ企業やボランティア、友の会との協働など、当館は他の美術館と較べても当初から優れた特色を有していた。館の設立と運営には多くの人々の努力、理解と支援があったことは言うまでもない。

だが、40年を通観すれば、開館21年目の2003年に建物を一部増築、刷新した以降であろうか、他の地方美術館も被った困難に当館も次第に苦むようになり現在に至っている。ここ10数年のあいだに事業費はほぼ半減し、作品購入予算はゼロの状態が10年続いている。なんとか活動が続けられたのは、それまでの有形無形の蓄積と外部からの支援、そして学芸員ら職員の不断の努力によってである。

過去に開催していたような大規模特別展の減少は来館者の目にも明らかであろう。それでも他館との連携や様々な運営上の工夫、職員の能力と熱意によって、文化的に意義ある事業を実施し、来館者をはじめ各方面から好評を得てきた。展覧会などの内容の良さは単純に測りがたいが、ひとつだけ例を挙げれば、年間でも優れた公立館の展覧会に与えられる美連協大賞をここ10年ほどの間に当館は2度受賞している。一方、厳しい予算減のなかでも利用者の増に努め、実は、コロナ禍の影響を受ける直前の4年間は、開館当初を除けばトータルで過去最多の来館者数を記録した4年間となった。

しかし、過去の蓄積や特別な工夫と努力にのみ頼る運営は長続きしない。基盤の貧弱さはもはや隠しがたく、ほころびは特に建物や設備の老朽化、不具合において近年、表面化、深刻化している。緊急性のあるものから補修、改善する努力も追いつかず、昨年にはついに空調の故障で、開館中の展示室を急遽閉鎖する事態が生じた。

この5年ほどの間に、1980年代90年代にオープンした日本の美術館の多くが1-3年長期休館して全面的な改修を行っており、遅まきながら当館がこれを見倣うべきなのは明らかだ。持続可能性という言葉が近年よく聞かれるが、これは文化財の保存と公開を旨とする美術館が元来、本質的に求められる要件であったはずである。40周年を迎えた美術館は次の40年の持続可能性に向けて体制を立て直すことが急務である。

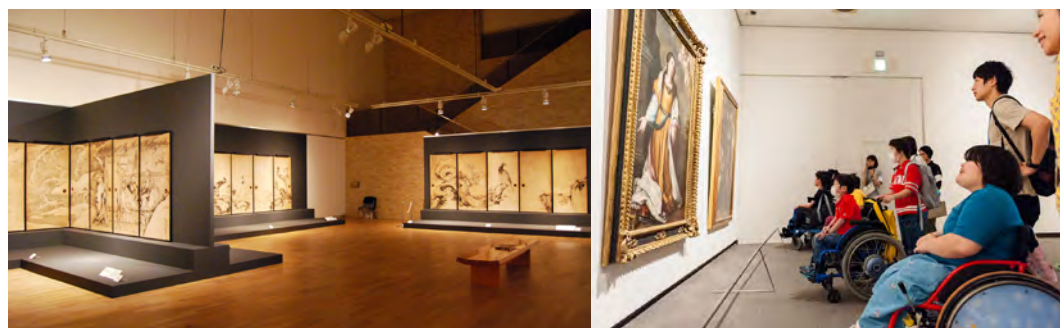
(三重県立美術館 館長)



これまで350本以上の多彩な展覧会を開催。1995年に始まったシリーズ「20世紀美術再見」では10年ごとの美術を、ジャンルを越えて大規模に並べ話題となる。写真は「1930年代」展の様子。

三重県立美術館は1982年9月、東海地方初の本格的な美術館としてオープンし、これまでに約570万人の来館者を迎えた。写真はエントランスホールで行われた開館記念展レセプション。

2003年に一部増改築。美術体験室、ショップやレストランなどの機能の充実とともに、作品の一括受贈にあわせて戦後具象彫刻の第一人者、柳原義達の記念館がこの時誕生した。



方針に則った収集により収蔵品は6000点を超える。三重にゆかりある江戸期の異色画家、曾我蕭白については展覧会もたびたび開催。重要文化財に指定された所蔵品、旧永島家襖絵の展示風景。

学校、大学等と協力しながら各種ワークショップや鑑賞ツール作成等、教育普及も行ってきた。近年は特別支援学校との連携やアクセシビリティの向上を図る事業も実施している。

多田美波《曙》が設置されるまで —開館前後の資料から—

橋本三奈

三重県立美術館の正面玄関ロビーには、1982年の開館時より展示されている壁面レリーフがある(図1)。今から40年前の開館に合わせて設置されることとなった、多田美波(1924-2014)の《曙》は、高さ530cm、幅1800cm、奥行13cmという壮大なスケールの作品である。残された当時の記録をたどり、設置されることとなった経緯をふりかえることで、建築設計と並行して行われた陶壁制作の一大プロジェクトをご紹介します。

作品制作の経緯

美術館開館に先立ち、収蔵作品を選定するための資料選定委員会が1980年に設置された。当時の会議録には「大きな壁面を何か考えていただきたいと頼んであります。(中略)今後とも多田さんと相談して決めます」とあり、彫刻家の多田美波にエントランスの壁面に作品を制作する依頼をおこなったことが記されている。

さらに、鏡を使ってはどうかとの意見が関係者から寄せられ、作品には鏡面仕上げのステンレスが大々的に使用される計画もあった。記録から、設置する作品の規模や材質については作家と建築事務所などの関係者、三重県との間で協議を重ねたうえで決定したことがわかる。

資料選定委員会では、当館の壁面や柱に使用する素材についても議論されていた。タイルの色は白っぽく、手作り感を出したいとの意見を受けて、内外の壁に使用するタイルには、伊賀焼のタイルが特別に開発、制作された。淡く白いタイルは長短2種類、計35万枚が用意され、長いタイルと短いタイルを交互に並べるフランス張りという方法で張られている。内外壁に伊賀焼タイルを使用することが決まった後に、内装と調和のとれたレリーフの作品を組み入れるという方向付けがなされ、作品の素材の一つとして「伊賀焼タイル」を用いることになった。

タイル素材を使用することについて多田は、

「私の作品は、これまでどちらかと言えば、金属、鏡、樹脂などの新しい素材を使ったものが多かったが、周囲の雰囲気を壊さずに、私の作品が何かを主張することなく、飛び出さないように抑えるために伊賀焼タイルを選びました。伝統と新しいものをうまく組み合わせたいという思いがあり、伊賀焼タイルの土だけで出したい焼き物の原点に基づいたような色、その美しさに魅せられました」¹⁾と語っている。

《曙》のタイルについて

作品に使用されたタイルは三重県伊賀市の長谷製陶株式会社で制作された。タイルは、色調の異なる伊賀の土を混ぜ合わせた原料を用いて湿式製法で成形し、登り窯で焼成された。湿式タイルは、水分を吸収することでわずかに膨張、収縮する特性をもつ²⁾ことから、耐久性の検査も入念に行われたことが聞き取り調査より明らかとなった。登り窯で焼成されたせり器質タイルは、焼成温度と灰の動き、そして灰の作用によって、タイルの表面に一つ一つ異なった自然な模様ができ、独特な味わいをもつタイルとなった。この作品には約5000枚のタイルが使用されている。絶妙な色の違いによってグラデーションを表現するため、2倍以上のタイルを焼成し、その中から選んで組み合わせた、との記録がある。多田は、制作前に自身の作品に使用する素材について研究を重ねており³⁾、素材のもつ性質だけでなく作品が置かれる環境に配慮して素材の選定をしている。また、作品保全を制作と同様に重視してい

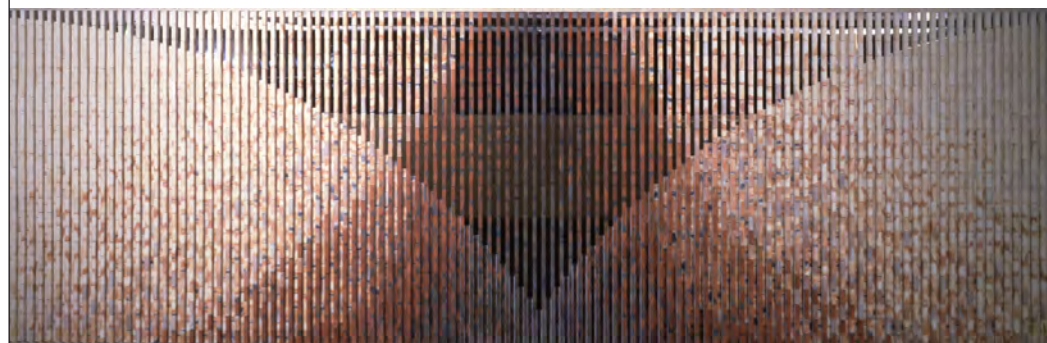


図1 | 多田美波《曙》1982年 伊賀焼タイル、ステンレス

たことが、作品に使用したタイルからわかる(図2)。そのタイルは、上下に空けられた穴に銅線が通され、作品背面の壁に設置された芯棒にその銅線を巻き、モルタルで壁面に固定されていることが図面や聞き取り調査よりわかった(図3)。

開館の2年前から構想を練り、こうして《曙》は完成した。



図2 | 《曙》に使用されたタイルと同時期に焼成された予備タイル 6.0×6.0×23.0cm 資料提供：長谷製陶株式会社

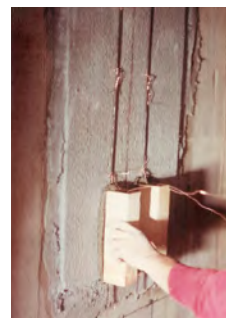


図3 | 壁面にタイルを設置する試験(三重県伊賀市にて) 画像提供：多田美波研究所

謝辞

本稿執筆にあたって、中森之博氏、小島憲二氏、多田美波研究所の岩本八千代氏、波部克己氏、本間充明氏、長谷製陶株式会社、三重県工業研究所窯業研究室の谷口弘明氏に多大なるご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。(順不同)

註

- 1 | 「伊賀焼タイルでお化粧」『朝日新聞』(朝刊)1981年11月15日付。
- 2 | 素木洋一「セラミック概論(41)」『窯業協会誌71』、公益社団法人日本セラミックス協会、1963年、67-74頁
- 3 | 田川亮三「うるおいあるまちづくり(多田美波と対談)」『出会いの軌び—知事と33人の対談集—』、1995年、田川量子・出版、171-172頁